

目的 日常生活においてみられる模様は多種多様であり、これらの模様はその形態および配色の相違により、イメージは変化するものと考えられるので、形態および配色との相互関係を検討した。今回は連続模様を主とした2色配色について、1つの試料群をつくることとした。因子分析により模様のイメージを求め、各因子に關する要因分析を行った。またイメージの類似性判断によるグループ化を行い、形態および配色がイメージにおよぼす効果について検討した。

方法 自然形、抽象形、幾何形の中から均等に連続した模様20種を選定し、画用紙を用いて20×25cm<sup>2</sup>の大きさに白黒で描いた。配色シミュレーション装置を用いて白黒図形をテレビモニターに提示し、17形容詞対による5段階評価法で評定を行った。形容詞対を変数として因子分析を行い、因子負荷量を求め、試料の因子得点より各因子の代表となる模様7種類を選択した。これらに13配色を施し、再び形容詞対による評定を行い、因子分析し、数量化I類、クラスター分析により要因分析を行った。

結果 白と黒による模様のイメージは評価、力量、嗜好性、あっさり感、活動の因子であらわされる。配色を施した模様のイメージは評価、活動、冷たさ、重さ、安定性の因子であらわされる。模様の形態および配色のいずれが各因子に影響を与えるかについて検討した結果、今回の実験範囲においては主に配色が関係し、図と地との色相差、色相、トーン差およびトーンが影響する。クラスター分析の結果もほぼ同様に配色状態が同類のものがグループ化されている。